



Tempio Shinnyo-ji

Sede italiana del Monastero di Daijo-ji di Kanazawa in Giappone

Via Vittorio Emanuele II n. 171 - 50134 Firenze

tel: 0039.339.8826023

e-mail: centro@zenfirenze.it

www.zenfirenze.it

Keizan-zenji e le donne

横浜善光寺留学僧育英会論文集より抜萃

定着し発展する「アメリカ禅」
講演 瑩山禪師と女性
keizan-zenji and women



東 隆真

駒澤女子大学学長
横浜善光寺留学僧育英会理事

Ryushin Azuma

**Presidente dell'Università Femminile di Komazawa
D. Lit**

■米国禅センター巡歴(2)

定着し発展する「アメリカ禅」

東 隆眞(駒澤女子大学学長・横浜善光寺留学僧育英会理事)

前角老師開創の禅センターで講演

一九九七年七月二日から八月一日までの日程で、黒田武志(横浜市善光寺住職・横浜善光寺留学僧育英会理事)、阿部慈園(鎌倉市黙仙寺住職・明治大学教授・佐藤丈夫(国書刊行会)それに東隆眞の四人は、アメリカに渡った。私たちは、カルフォルニア州、ユタ州、オレゴン州の各禅センターを中心に「七カ所を歴訪し、見学し、交歓し、法要をつとめ、坐禅を行なった。禅センターの要請によって、阿部先生と私

は、講演会の講師となり、質疑にこたえた。阿部先生の演題は、中国初期禅宗における楞伽經と金剛經に関するものであり、私は登山禪師と女性についてのものであった(講演内容は別掲)。

このたびの渡米の主な目的は、一昨年、遷化の約一週間まえに約束した故前角老師の開創した禅センター、寺院の歴訪、巡礼を完結することであった。前角老師の開創地の禅センター・オヴ・ロサンゼルス、ロサンゼルス・禅マウンテン・センター、禅コミュニティ・オヴ・ニュー

とめた。さらに本年一七回忌の志保見道雲老師をお招きするあたりで、私が前角老師小祥忌(三回忌)の法要の導師をつとめた。

私は、やや個人的なことからわたるかも知れないが、前角老師、志保見老師、秦慧玉禪師にまつわる秘話とかエピソードを紹介しておきたいとおもつ。

その当時、秦禪師は、世界を駆ける行動する禪師とよばれた。

志保見老師は、外国語を使わないまま、単身で世界一七カ国を視察した豪胆細心の傑僧。

前角老師は、自由自在に英語を駆使することのできる希有の師である。

昭和五十八年の夏、ある人を使者として、秦慧玉禪師のご依頼があった。

昭和五十九年三月一八日から五日間にわたって、東京とその近郊で、サミットが開催される予定となった。テーマは「生命科学と人間の会議」。

100

このサミットの講師として、政府筋から講師として講義するようとの要請があり、これに応ずることにした。

ついで、生命科学に対する仏教の立場について意見を聞かせてほしい。いや、原稿をつくってほしいとのことである。もちろん、私だけに依頼になったのではなく、関係各方面にもご下命になったのであろう。

そこで、私は、急遽これにおこたえたのであった。この間の消息については、『秦慧玉禪師法語録』(平成三年 宝昌寺 秦慧孝老師発行)に、秦禪師のおこたえが収録されており、ここに明らかであるので、くわしいことはそちらにゆずる。秦禪師からは、御礼のお手紙をいただき、私はこれを表装して、大切に保管している。さて、秦禪師はサミットで、日本語で講義される。これを通訳する必要がある。通訳として前角老師を起用することを決定された。禪師か

いまや、前角老師、志保見老師、秦禪師そして藤吉法主もない。その後、この種のサミットがこの国によって開催され、宗教界とくに仏教者が参加するというようななはしを聞くこともなくなった。残念なことである。私は、往事を回想しながら、ねんごろに法語をとなえ、香を焚き、経を読んだことであった。

ロサンゼルスでは、曹洞宗北アメリカ総監部、北アメリカ開教センターの古溪理哉師、横山泰賢師、小野義彦氏、カナダのバンクーバーから娘の東洋子らが参加し、加勢してくれた。サンフランシスコ、オークランドでは、曹洞宗北アメリカ開教総監部、北アメリカ開教センターの総監秋葉玄吾老師、桑港寺住職南原一貴老師らが参加し、応援してくれた。また、終始、マサチューセッツ州のバイオニア・パレー禪堂住職藤田一照老師、ロサンゼルス禅センターに安居

らお電話で、その旨をうけたまわった。前書に「中村先生(中村元博士のこと。東注)にも相談し、アメリカ、ロサンゼルス禅センター主任の前角博雄師にも電話して帰国してもらいました」と書いてある。秦禪師は、志保見道雲老師とは若いころ般若林秦慧昭禪師の会下で宮崎突保禪師とともに同釜の飯を喫した間柄であり、また前角老師が印可を受けた芋坂光龍老漢は、秦禪師もその鉗鉏を受けた臨済宗の巨匠である。このような仏縁が重なった。私は前角老師と、原稿とその翻訳の件で、二、三回、電話で打ち合わせと連絡をした。

ところが、秦禪師は、サミット第一日、三月一八日、にわかに身体が不調となり、三井記念病院に入院することとなった。サミット出席が不可能となった。その代理として、浄土宗、鎌倉市光明寺の藤吉慈海法主がつとめられた。

している遠藤博因師が手伝ってくれた。私は登山禪師に関する講義の教材を数種類あらかじめ用意し、準備していたが、結局、「登山禪師と女性」についてを選択し、これ一つにしまった。講演が終わって、質疑応答がはじまるのはどの会場でも同じである。アメリカ人参禪者の質問、疑問は、専門的かつ高度なものであった。彼らは、楞伽經や金剛經について、相当の知識をたくわえているようであった。また、中国の初祖達磨や六祖慧能の生涯や教説についても、学習が進んでいるようであった。日本の禅宗寺院で行なわれる坐禅会やカルチャーセンターの講座では、滅多に見ることのできない光景と云ってよいかも知れない。

思うに、はじめのころは、アメリカの禪者たちは、中国、北朝鮮、韓国、日本などからやってきた禪僧、学者たちの提唱、講義、著書などによって学習したのであろう。

101 特集・アメリカ禅

103 特集・アメリカ禅

しかし、現在は、そのような受動的な段階は終わり、アメリカ人禪者が、経典、祖録を講義し、提唱し、著書出版する時代となっているのだ。アメリカ人によるアメリカ人の仏教、禪の時代に入っている。また、アメリカ人と日本人が共同して修行し、教化するところから、さらに進んで、アメリカ人が日本人に禪を説く段階に入っていくであろう。このことをかつて私は指摘したが、それは、けっして過言ではないであろう。

活躍する女性僧侶・信者からの質問

さて、私は、登山禪師と女性について話した。なぜ、このテーマをとりあげたか。

一昨年、ロサンゼルス禅マウンテン・センターの禅堂で、道元禪師と登山禪師について話した。このとき、道元禪師の女性観、登山禪師と女性

に関して言及した。おわって、フレッチャー・アン・清泉先生（フレッチャー・チャールス・天心師夫人）から、登山禪師の女性観や女性とのかわりについて教えてほしいと求められた。清泉先生のこのことばが、私の念頭から離れなかった。このテーマをとりあげたという次第である。

道元禪師の男女平等、女性観の主張をうけついで登山禪師は、女性を救う寺院をつくりたいという誓願をおこし、女性の住職、女性の法蘭（後継者）を養成し、これを表現したというのが要旨である。女性の参禅者は耳をそばだて目を輝かせて聞き入ってくれた。これは、今回も通訳の労をとってくれた藤田一照老師の語学力が加わっているにちがいない。私は、登山禪師と女性について、日本文、英文で小冊子をつくり、アメリカの禅センターに送りたいがどうかと黒田老師に相談した。師は、双手をあげて即座に

賛同してくれた。帰国後、登山禪師の女性尊重の考えを聞いて新しい勇気が生じてきたという礼状を女性参禅者から受けた。

アメリカ夫妻が運営している。近くのもトキリスト教会を買収して坐禅堂に改造した。夫人は、慈友・ケネット師の指導をうけた。慈友・ケネット老師は、大本山總持寺に安居して、孤峯智際禪師や余語翠巖老師の提撕を受けたアメリカ人女性。アメリカに帰国して寺院を創設し、昨年遷化したようである。著書のなかに登山禪師の『伝光録』（英訳本一九九三年刊）がある。本書を私は南原一貴老師から寄贈された。ダルマ

禅センター・オヴ・ロサンゼルスでは、ナカオ・ウェンディ・恵玉師が、事実上の主管者となっている。彼女も登山禪師と女性について、特に関心を抱いてくれた一人である。

ロサンゼルス・禅マウンテン・センターの住職は、フレッチャー・チャールス・天心師であるが、夫人のフレッチャー・アン・清泉先生の指導力、行動力は天心老師にまさるともおとらないところがあると見た。

禅コミュニティ・オヴ・オレゴンの地蔵院住職ベイス・ジャン・澄禪師も尼僧である。

ダルマレイン・禅センター（法雨寺）は、ア

いただく。ブランチ・春芳・ハートマン師。七〇歳前後か。びたりと身につけた法衣姿は、数十年の参禅経歴を無言のうちに表現している。ソルト・レイク・シティの観世音禅センターのメーゼル・デニス・玄法老師のステファニー夫人は、モルモン教の教祖ブリガム・ヤングの玄孫だということである。過日、黒田純夫老師に受戒して仏弟子となった。私は「不露頂」の揮毫をさしあげ、この語の意味を説明した。中国、唐代、末山丁然尼の語である。玄法老師は大きくうなずいて、この禅センターは彼女の協力が不可欠であることを強調し、彼女は、まさに「不露頂」の語にふさわしい女性だと言った。かたわらの夫人は微笑をこえて、私に握手を求めた。

さて、私の講演は一時間足らずであるが、終わって、いろいろな質問がとび出した。ほとんど女性からであった。

を裏切ったり、失望させたりしないようにするにはどのように応答すればよいか。当座のぎでなんとか切り抜けたが、私自身のころの内部には、釈然としないものが残っている。質問のなかには、日本の側で緊急に具体的な対応策を講じなければならぬ性質のものもある。果たして、日本の側は、これらにただちにきちんとこたえることができるかどうか。対応できないれば、くりかえすが、彼女たちは、日本の仏教界に失望して、今後何も求めなくなるとも知れない。日本の仏教にとっても、一つの岐路に立たされているといえよう。

アメリカ人によるアメリカの仏教

北アメリカに日本仏教が伝えられてから、およそ一世紀が経過した。この一世紀百年のもつ意味は大きい。ある人によれば、宗教とか教育

これらの質問を、ここでまとめてみると、今更ながらに、当惑する自分を見いだすのである。質問にいづく。

登山禪師が女性の後継者や住職を決めたことで、まわりから迫害をうけたり邪魔あつたかをされなかったか。

登山禪師のあと、日本仏教、曹洞宗では、女性の地位、立場の向上は盛んになっていったかどうか。

私は、出家したいのだが、日本へ行けば、禅の修行道場は、私を迎え入れてくれるかどうか。また、女性をうけ入れてくれる修行道場は、日本にいくつくらいあるのか。

尼僧で老師とよばれている禅の指導者は何人くらいいるのか。

尼僧は、いづれどのような宗教活動を行なっているのか。

これらの質問に対して、質問者の希望や期待

が新しく興起して、これが人心に定着するには、まず百年はかかるという。

曹洞宗は、大正一一、一二年（一九二一―一九二二）ごろ、ロサンゼルスに禅宗寺が開創された。一九三七年（昭和一二）には、同寺に北米開教総監部が設置され、両大本山北米別院となり、一九九七年は創立七五周年を迎え、曹洞宗北アメリカ開教センター（所長奥村正博老師）が発足した。

北アメリカという西海岸の仏教は、日本人僧侶による在留日本人を対象とした教化伝道活動という面と、日本人僧侶によるアメリカ人を対象とした教化活動という面とに分けられよう。

禅宗寺は、その当初から、どちらかといえば、日本人信者を育成し、教化してきた。一九六〇年代の後半ごろから、ロサンゼルス、ニューヨークを中心に活動する前角老師と、サンフランシスコを拠点とした鈴木俊隆老師とは、日本人以

外、すなわち主としてアメリカ人をもつばら対象にして、教化伝道を行なってきた。

しかし、すでに、鈴木老師、前角老師はない。現段階は、老師の弟子ないし孫弟子の時代に入っている。

このほど、禅宗寺が開創七五周年を記念して小冊子（日本語訳版三六ページ）を発行した。題して、「仏種・北アメリカの大地に根付く」。これによると、二九の禅センター、寺院がある。「曹洞宗寺院名鑑」（平成九年版、曹洞宗宗務庁刊）も同じく二九の禅センター、寺院の名を掲げている。

前角老師の白梅会（ホワイト・ブラム・アサング）の名簿には、黒田ファミリーをふくめて四二の名前、住所などが記載されている。一説には、曹洞宗関係は、南アメリカ、ハワイなどを合わせると二〇〇カ所くらいのグループがあるらしい。しかし、その実態は十分に把握され

言ってくれた。図書館買部には英文の仏教書、禅書が書棚にたくさん並べてある。前角老師最後の坐禅指導の遺跡でもある。

観世音禅センターのデニス・玄法・メーゼル老師は、アメリカ各地はもとより、フランス、イギリス、ドイツ、オランダ、ポーランドに参禅指導に出かけている。玄法老師のお弟子のなかには、モルモン教の元教師もいる。そういえば、アメリカでは、キリスト教、ユダヤ教などと仏教との衝突、対立はほとんどないらしい。仏教は、争いを好まない平和で寛容な宗教だという印象がアメリカ人一般にあるらしい。

ところで、アメリカ人による仏教、禅のアメリカ化というか、定着化については、先にも触れたが、日本の仏教、禅の側からすれば、懸念する向きがあるようである。アメリカ人に仏教、禅がわかるはずがない。このまま放置すれば、アメリカ禅は、似て非なる禅に变质していくであ

ているとはいえないようである。また、相互の連携などもどこまですすめられているか不明である。なかには、いささか首をかしげるをえないような禅者、禅グループも生まれているという批判を、日本で耳にする。このような状況もふくめて、いまアメリカの仏教禅は確実に、アメリカの宗教的、精神的土壌に根付き、定着しつつある。

禅センター・グリーン・ガルチエ・ファームは三〇、四〇人の修行者たちが定住して、農場や宿泊施設を運営し、その利益で資本をつくり、馬小屋を改造して禅堂として、自給自足の体制をとっている山中の修行道場。坐禅と作務を主体とする共同生活である。日本人の姿はまったくない。中国初期の禅僧たちの生活共同体もかくやと彷彿させるものがある。案内し応対してくれた白人の尼僧は、自分はアンダーソン真理師の弟子で、鈴木俊隆老師の孫弟子にあたると

ろうと、深刻にうけとめている日本側の関係者がいる。これは、半分は是、半分は非だと私は考えている。

個人的レベルの私見であるが、結果をいえば、今後にはともあれ、日本側とアメリカ側は、相互に連絡を密にしなが、理解しあい、交流しあい、協力しあつて、ともにそれぞれの活動を展開していくべきであろう。更に、目下のところは、できるだけ、日本側はアメリカ側に対して、物質的、精神的援助を行なうがよい。そしてアメリカの仏教、禅の健全な発展をのぞむべきである。もし、アメリカの仏教、禅に足りないところ、欠けているところがあるとするならば、日本側としてどう対応すればよいか検討すればよい。

ところで、また、私が出会ったアメリカの禅者たちは、禅者として最適な人物であるとうけとめられた。たとえば、デニス・玄法・メーゼ

ル老師は、若いころ、ロサンゼルスとサンフランシスコの山中で瞑想に明けつていたという。そして、宗教的なひとつの体験をえた。前角老師に会う機会があり、このことを伝えた。しかし、老師から「あなたは天狗になつていて」と言われ、全身から冷水をぶっかけられたような衝撃をうけた。それから前角老師について真剣に参禅するようになった。三十五年が経過する。日本語はよくわからないが禅の心はわかったという。いわば、この人は天性の禅者の趣きがある。アメリカの水球のオリンピック選手で、入賞した。空手か合気道の有段者でもある。動作は敏捷で、胸板は厚く、明るいスポーツマン。風貌がスティーブ・マックイーンに似ていると言つたら、苦笑していた。

今回は日程の都合で会えなかったが、ベルナルド・グラスマン・徹玄老師も、風貌は達磨大師にそっくりで、昔の表現でいえば、六尺ゆた

前角老師から戒を授けられて、仏教ファミリーを形成しているのが目立つ。前角老師ご自身がミラー夫人、令嬢一人（光代さん、嘉美さん）、令息一人（純道君）つまり一家あげて仏教徒である。家族的仏教といえよう。前角老師の教えを受けたアメリカの門人たちは、老師にならって仏教ファミリーをつくっているようである。

次に、彼らの構えている禅センターは、キリスト教やユダヤ教の教会、尼僧院を買収して改造したものがあるが、イスラムのモスクのような独自の寺院建築をつくっているわけではない。しかし、市街に存在する禅センターは、サンフランシスコ禅センターにしろ、禅センター・オヴ・ロサンゼルスにしろ、観世音禅センターにしろ、ダルマ・レイン禅センターにしろ、地域のメイン・ストリートというか、大通りに面している。このことは外来者である私どもに、頼もしい堂々たる安定感を与えてくれる。

かな偉丈夫、堂々たるものである。前角老師に三十年以上も師事して印可（前角門下では、印可をえた人は老師とよばれる）をえた第一の高弟。カリフォルニア大学で工学博士の学位を取得してグラマン社につとめていた技術者である。アメリカに仏教大学を開設したい。この悲願に燃えている。キャンパスの一部を取得したと聞いている。

ベイス・ジャン・澄禅師は、小児科の女医である。地域で大規模なボランティア活動を展開している。法衣を着たその一挙手一投足は、日本人禅僧のかたちを真似たなどというものではない。完全に規範にかなった身のこなしである。もし、神がいるならば、神はこの人を禅僧として選んだということになるか。

右は、一例を挙げたにすぎない。前角老師の後継者である。

次に、彼らの夫あるいは妻ないし子供たちも、

次に、禅センター・グリーン・ガルチエ・ファームや禅マウンテン・センターなどの僧堂生活は、日本の永平清規や瑩山清規が基本原則となっているにちがいない。しかし、いまや、これに加えてアメリカの実状に沿ったアメリカ式の規矩がつくられている。たとえば、英文、日本語をローマ字でつづった日課動行聖典が用いられている。その内容は、日本の曹洞宗のそれと全く同じではない。たとえば、修行者の個室が設けられている。これは、個人を尊重するアメリカ人社会の反映であろう。

私は、アメリカ仏教、アメリカ禅の限らない発展と世界の平和を願いながら、ここにペンを置く。

〔中外日報〕平成九年一〇月九日号

■講演

瑩山禪師と女性

東 隆眞（駒澤女子大学学長・横浜善光寺留学僧育英会理事）

瑩山禪師（二六八—二三五）と女性について、簡単に話をしたいと思っています。承知のとおり、瑩山禪師は、十三世紀なかばから、十四世紀前半、日本の鎌倉時代後期に登場した仏教の僧侶であります。

瑩山禪師は、道元禪師（一一〇〇—一二五三）の第四代の仏法の継承者であります。道元禪師は、日本の歴史のなかでもきわだってすぐれた宗教家であり、すごい仏教の哲学者、思想家であり、慈愛深い教育者であり、文筆ゆたかな文学者であります。道元禪師の禪の立場は、中

国の禅仏教の本質を明らかにし、正しい仏教の伝統を確かめ、禅宗のなかの曹洞宗の法統を継ぎ、福井県に永平寺を開創し、日本の曹洞宗の高祖と仰がれています。しかし、道元禪師の高潔な人格や普遍的な哲学思想などは、仏教とか、禅宗とかの枠をこえた世界的な国際的な意義をそなえています。

瑩山禪師は、道元禪師の第四代の継承者として、石川県に總持寺を開創し（いまは神奈川県に移転）、道元禪師とならんで、日本の曹洞宗の太祖と仰がれています。瑩山禪師は、道元禪師

の仏法を継承し、発展させました。それは、いくつかの点から指摘することが出来ますが、ここでは、女性観と女性とのかわりについてご紹介しておきましょう。

瑩山禪師の女性観と女性とのかわりについてお話しするまえに、道元禪師のことをとりあげておきたいとおもいます。

道元禪師は一二三九年京都で「正法眼蔵」「礼拝得髓」の巻をあらわして、当時の仏教界の男尊女卑の弊風や女性蔑視の悪習慣を否定し、男女平等、女性尊重を説いて、仏道修行における男女の人格の平等を強調したのです。

道元禪師は、「日本国にひとつの笑いごとがある。いわゆる結界といい、あるいは大乗の道場といって、女性の出家者、女性らの入ることを禁じている。その邪風が長いあいだ伝わって、人びとはそのわけを考えたこともない」と当時の

金峰山、東大寺そのほか仏教の代表的寺院には、結界があり、道場があつたのです。そして、「はなはだしく愚かな人は、女性に性欲の対象である」と考えている。しかし、「女性になんの咎があるというのか」「男児がどのような理由で貴いというのか」と批判し、「男とか女とかを論じてはならない。これが仏道の最高の法則である」と主張します。

道元禪師によれば、「仏教の真髄を得るのも、それを嗣ぐものも、ひとえにまことの心により、信ずる心による。それは、外から来るものでもなく、内から出てくるものでもない。ただ、法を重んじ、身を軽くするのみである」といって、法（真理）を尊重することを重視し、「法を得ることとを敬重せよ」と強調し、この「法を得ること」すなわち真理の体験においては「男とか女とかを論じてはならない。これが仏教の最高の法則である」という主張につながっていくのであり

112

ます。

このような道元禪師の女性観は、日本仏教史のうえでもとくにすぐれた考え方としてのみならず、ルネッサンスやマルティン・ルーターよりはるか以前に、法（真理）を体得する男女の人格の尊厳性を主張したとして、きわめて高く評価されています。

道元禪師のもとで仏教、禅を学んだ人びとのなかに、女性の出家や信者がいたことは、歴史的資料のなかにも認めることが出来ますが、これがより具体的に展開されたのは、瑩山禪師によってであります。

瑩山禪師の女性観は、次のことばによって明らかであります。

「そこで諸君、初心者、後輩たちよ。かたじけなくも、釈迦牟尼仏の児孫として、仏のなされたことを受け継がせていただいてきているでは

ないか。どうして、世間の人の愛することを愛することができようか。何はともあれ、すべての是非、善悪、男女の差別の妄見を解脱せよ」

これは瑩山禪師の提唱録である「伝光録」の第四十一祖後同安大師の章の一節であります。仏教徒として、男女差別の妄見を解脱せよというのであります。これは、道元禪師の男女平等思想を継承すると理解してよいとおもいます。

道元禪師の法統の流れのある瑩山禪師であるからには、瑩山禪師の考えは道元禪師と共通するところが多いのはあたりまえといえはあたりまえですが、このあたりまえのことがきちんとはつきりしていることは、道元禪師、瑩山禪師の教えを学ぶ者にとって、きわめて重大であります。中国仏教史上さほどその名を知られていない如浄禪師の存在が、その弟子道元禪師によって輝きを増したように、後世の門流によって始祖の教えが具体化することを考えなければ

ならないのであります。

瑩山禪師は、酒勾という地頭の一族の帰依をうけ、一三一九年、広大な土地と寺院を寄進されています。これが、いまの永光寺です。酒勾一族のうち、とくに女性たちの帰依をうけました。性禪と黙謙祖忍は、母娘で、のちに瑩山禪師の弟子として出家しました。

瑩山禪師は、性禪に対して「師公」という敬称でよび、蔵荆庵の房主にしました。日本の曹洞宗の最初の女性住職の誕生です。また、黙謙祖忍を、永平寺の境内にある円通院の住職に任命しました。円通院は、瑩山禪師の祖母の追善供養のために建てたお寺です。しかも、円通院は、瑩山禪師の母の悲願を実現するための道場であり、また瑩山禪師自身が仏教をひろめ人びとを救うための折りの道場でもあったのです。さらにまた、黙謙祖忍は宝応寺の房主にも任命されています。明照円観は、瑩山禪師の弟子と

なり、黙謙祖忍のあと、円通院と宝応寺の住職になっていきます。金燈と慧球は、瑩山禪師の弟子となり日夜参禅にはげみ、大悟し、瑩山禪師の法脈を継承したといえます。

そのほか、円意、心妙、心正、浄忍、忍戒、妙心などという女性の出家者の名前が、史料のなかに散見されます。このように、瑩山禪師は、女性の信者を出家者とし、これらの人びとを住職に任命し、後継者として認めました。瑩山禪師自身が、観音信仰の深い祖母や母の家庭に生育されたことが、その直接の背景となっていると思われまます。

ところで、瑩山禪師は、その著「洞谷記」に黙謙祖忍とは、磁石と鉄のようにあい離れることのない僧と檀那、師と弟子であるとのべてその深い人格的交流をしるしています。また、瑩山禪師と黙謙祖忍との問答が次のようにのこされています。

115 特集・アメリカ禪

114

「予（瑩山禪師）は、祖忍に問う。今年もやがて去り、新しい春がやってくる。さて、あなたの宗教生活はどうか。」

祖忍は答える。

影のない樹の枝（あるはずのない樹木の枝。永遠の生命をあらわす）に、なんの時節がありましょうか（区切りなどない。始めもなければおわりもない）

祖忍公の最初のすぐれた答えである」

黙謐祖忍の強烈な求道心とその内容、瑩山禪師の固い信頼、そして師弟の強いきずな、僧と信者たちの一味和合の精神を、ここに読みとることが出来ましょう。

道元禪師から瑩山禪師への卓越した女性観とそれにもとづく女性仏教の展開は、その後の日本の曹洞宗の歴史のなかで、必ずしも正しく順調に継承されたというわけではなく、むしろ男

尊女卑、女性蔑視の一般的風潮のなかに埋没してしまった点があったのは残念なことです。

しかし、この百年間あまり、世界は物質文明、科学技術文明が支配して、物が豊かで便利な生活、自我の拡大をひたすら追求してきました。この文明は、いまやその限界をみずから証明しようとしています。そして、このとき、人間そのもののへの目覚めが求められるでしょう。人間とはなにか、人生はなんのためにあるのか、ということが問われなければならないようになりました。二十一世紀は、人間の時代だといえましょう。このようなわけで、人間を問うとき、人間を凝視するとき、必ず男女とはなにか、男女のあり方がとりあげられるでしょう。男女とは人間だからです。この男女という人間がその根本からたえず目覚められていくとき、道元禪師、瑩山禪師の女性観は、私たちに大きな課題をなげかけてくると思われます。

116

Keizan-zenji and Women

by Ryushin Azuma

President of Komazawa Women's University
D. Lit

I would like to talk about "Keizan-zenji and Women". As you know, Keizan-zenji is a Zen-priest who lived from the middle of the 13th Century to the first half of the 14th Century, namely the last part of the Kamakura Period. Keizan-zenji is the fourth patriarch who follows Dogen-zenji(1200-1253).

In Japanese history, Dogen-zenji was one of the most excellent religionist, an acute philosopher and a merciful teacher. Moreover he had abundant knowledge of literature. His attitude of Zen is to clarify the essence of Chinese Zen Buddhism and to confirm the tradition of the right Buddhism. He succeeded to Soto-Zen in the Chinese Zen Buddhism, and founded Eihei-ji in Fukui-prefecture. Now he is admired as the "Koso"(Founder). His noble character and his universal philosophy have world-wide significance beyond the stereotyped -thinking of Buddhism and Zen.

Keizan-zenji as the 4th successor of Dogen-zenji founded Sojiji in Ishikawa prefecture. This temple was moved to Kanagawa prefecture in the Meiji-Period. We admire as him "Taiso" of Japanese Soto-Zen. Keizan-zenji succeeded to the dharma of Dogen-zenji, propagated and developed the Soto-Zen. I can point this out through many ways but in this lecture I want to introduce his view of women and his relationship with women.

Before talking about it, I would like to begin with the same problem in Dogen-zenji. Dogen-zenji wrote the chapter of "Raihaitokuzui" in the "Shobogenzo" in Kyoto in 1239. In this chapter he denied the predominance of man over woman in the world of Buddhism at that time and advocated the equality between sexes in the Buddhist practice. He says as follows in the "Shobogenzo".

"In Japan there is a ridiculous thing. There is a place called "Kekkai" or "Dojo of Mahayana" where women cannot enter. Though it is a long standing custom,

18

people never think about its origin."

In this way Dogen-zenji criticized Japanese traditional Buddhism. In those days the famous temples, for example, Hieizan, Koyasan, Kinpozan and Todaiji, had the place of "Kekkai" or "Dojo".

Dogen-zenji says "The extremely foolish people think that women are the object of sexual desire. But what kind of faults do women have? Are there any reasons why men are noble?". And he says, "Don't be concerned with the differences between men and women. This is the basic principle of supreme law of Buddhism."

Dogen-zenji shows his attitude as follows, "The acquisition of the essence of Buddha dharma and the succession of it is owed to the faithful mind based on the true enlightenment. This comes from neither inside or outside. It is important to regard dharma very highly and to make light of life."

Thus Dogen-zenji thinks highly with respect to free ourselves from worldly concerns. In his experiences of dharma this thought summarizes his view of women, namely "Don't be concerned with the differences between men and women. This is a basic principle of the supreme law of Buddhism."

This view of women is not only estimated highly as an excellent thought in the history of Japanese Buddhism but also as the insistence of the dignity of men's and women's character ever before the Renaissance and Martin Luther's time.

Among people who studied dharma and Zen under Dogen-zenji, we can confirm that there were some nuns and women believers from historical sources. But it was by Keizan-zenji that it was firmly established.

The Keizan-zenji's view of women is clarified by the following words. "So New believers and followers!, fortunately you succeed to what Sakyamuni-Buddha did as a Buddhist. Why do you desire what the masses want? In any case, you must be free from all illusions of kinds of classification between even right and wrong and of the distinction between men and women."

This passage is cited from the chapter of the 41th patriarch Go-Doan-Daishi in the "Denkoroku" of Keizan-zenji. In this passage Keizan-zenji shows that Buddhist must be free from the idea of discrimination between men and women. We can understand that this succeeds from Dogen-zenji's thought. Since Keizan-zenji is the follower of Dogen-zenji, this similarity is natural. But it is important that we confirm the same attitude between Dogen-zenji and Keizan-zenji. As Nyojo-zenji, not well known in the Chinese Zen Buddhism, had increased to shine through Dogen-zenji, so founder's teachings must be developed by his followers.

The family of Sakawa who was the lord of a manor embraced Keizan-zenji.

19

that these views were buried in the ground of the general tendency of male chauvinism.

But in this century the material civilization and the scientific technology have ruled our world. We have pursued a more the convenient life and realization of our self-desire. Now we are convinced of the limit of our civilization. Therefore it is necessary to enlighten on human beings themselves. It must be questioned what a human being are, or what our life is. We can say that the 21st century is the time of human life. When we ask and observe human beings, the problems of men and women, namely what are men and women?, must be argued. Because men and women are human beings. I think that the view of women from Dogen-zenji and Keizan-zenji gives us important insights, when we consider our fundamental selves.

In 1995 and 1997, I visited about twenty places in America, including seven Zen Centers which Maezumi Hakuyu Roshi founded. This visit was in response to the request of Maezumi Roshi. Then I lectured about "Keizan-zenji and Women" in Los Angeles Zen Center (Busshinji), Zen Mountain Monastery (Doshinji), Kanzeon Sangha Zen Center (Hoshinji), Zen Community of Oregon (Jizoin) and San Francisco Zen Center.

This pamphlet is translated by Y. Ando, Assistant professor of Komazawa Women's University, and printed and offered by Kuroda Bushi Roshi, Yokohama Zenkoji.

1998 Jan. Ryushin Azuma

21

They donated the land and a temple in 1319. This temple is Yokoji. The women of the family especially embraced. For example Shozen and Mokufu-Sonin, mother and daughter renounced the world and later became the disciples of Keizan-zenji. Keizan-zenji referred Shozen as "shikoh" which is the proper title and made her the chief priest of Zokeian. It was the first appearance of a woman chief priest in Sotoshu.

Then Keizan-zenji ordained Sonin the chief priest in Enzuin which was the temple in the grounds of Yokoji. Enzuin was not only built in order to hold a memorial service in honor of grandmother but also was the dojo to realize the earnest wish of Keizan-zenji's mother. Moreover this temple was the dojo where Keizan-zenji propagated Buddhism and hoped to save people.

In addition to that Mokufu-Sonin was ordained as the chief priest in Hooji. Meisho-Enkan was the cousin of Keizan-zenji, became a disciple of Keizan-zenji and she became the chief priest in Enzuin after Mokufu-Sonin.

Konto-Ekyo became a disciple, devoted herself to practicing Zazen every day, and then she succeeded to Keizan-zenji.

In many sources we can find the names of nuns, such as En'i, Shinmyo, Shinsho, Jonin, Ninkai and Myoshin and more.

In this way, Keizan-zenji made women believers nuns, ordained them a chief priests and regarded them as successors. Keizan-zenji himself grew up under the deep faith of Avalokitesvara (Kannon) of his grandmother and mother. His background seemed to form his view of women. Keizan-zenji stated in the "Tohkoku" that the relationship of Mokufu-Sonin and he are that of a priest and a donor or a master and a disciple who cannot be separated like magnet and iron.

We can find the dialogue between Keizan-zenji and Mokufu-Sonin as follows in the writing.

I (Keizan-zenji) ask Sonin "This year is almost gone and another new year will come. So how about your religious life?"

Sonin answers "In the branches of the tree without shadow (This branch means eternal life) is there any kind of time (which is not separated and has no beginning or end)?"

This is the first excellent answer given by Sonin.

In this dialogue we can see Sonin's earnest mind to Buddha-dharma, Keizan-zenji's deep trust in Sonin, the bondage between master and disciple, and the spirit of harmony between priest and believer.

The prominent view of women established in Dogen-zenji and Keizan-zenji and the development of Buddhism with women based on their views did not necessarily succeed properly in the history of Japanese Sotoshu. It is regrettable

20